



喜多埜

しめ縄の話

十月は収穫の最盛期。豊かに実った稲穂は脱穀精米の後、白米となって食卓へ運ばれ、残った藁(ワラ)で、しめ縄が作られます。

このしめ縄は古代から神域と俗界との区切りとして用いられ、日本最古の書物、古事記には「天照大神が天之岩戸に再び籠られないように、しめ縄を張った」という記述があり、これがしめ縄の初見といわれています。

お正月にご家庭の玄関にしめ縄を飾る方は今も多いようですが、あれには、お正月に全ての生きとし生ける者のもとに來られる年神さま(一年間の生命である御年魂(おとしだま))を授けると云われている(に、「我が家は神さまのお陰で今年実った稲でしめ縄を作る事が出来ました。神様に相応しい清浄な空間となった我が家にどうかお立ち寄りになって御年魂をお授け下さい」とお伝えする意味があり、神さまを家にお迎えする事によって、一年間の生命を頂くという信仰が、今もしめ縄を飾るといふ形で残っているようです。

このしめ縄は正月十五日まで飾られ、その後はお焚き上げ行事である「とんど祭」で焼き上げられます。この時の火で餅を焼き、灰もまた次の稲作の肥料となり、命のリサイクルが昔の日本では行われてきました。

しかし、しめ縄だけで大量の藁が消費されるはずもなく、昔は残った藁でワラジやムシロ、屋根や土壁の材料を作りましたが、現在は野焼きにするか、捨てるしかない現状に、命の循環、物の大切さをしめ縄に感じます。

先月二十五日。半年間に渡って名古屋東部丘陵において「自然の叡智」、「循環型社会」をテーマに掲げた愛知万博が閉幕しました。テーマが今までの科学技術の進歩ではなく、自然に回帰すべきとした点においても過去に類例のない万博であったと言えるでしょう。

この万博で問われたテーマはまさに日本ではなくては発信出来なかったテーマといえます。それは神社をはじめとする自然崇拜などにみられる自然との共生、伝統建築にみられる木材の再利用や、どんなものも最後の最後まで利用する始末の極意ともいえる、物を大事にするという習俗の考えなくしては、このテーマには至らなかつたでしょう。ケチ臭いと言えばそれまでですが、昨今の原油高を見るにつれ、環境破壊文明といわれる現代社会に対する循環型社会の提案は、この万博の残した大きな財産であつたといえるのではないでしようか。

NU茶屋町オープン

いよいよ茶屋町に「NU(ヌー)茶屋町」がこの十月二十日にオープンする運びとなりました。NUとは「North Umeda」の略称であり、キタの新しい顔ともいえます。また御旅所のすぐ裏という事もあり、今後の賑わいが大変楽しみな施設です。

当神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ポータフォン
ez web 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

